



季刊



弥生の出雲王に出会える



出雲弥生の森博物館だより

IZUMO YAYOINOMORI MUSEUM

第16号

(2015年1月)

春季企画展

「出雲の青と藍」

2月28日(土)～5月11日(月)

【観覧無料】

★関連講演会

3月7日(土) 14時～16時

「出雲の藍染めの歴史について(仮)

【講師】岡 宏三 氏

(島根県立古代出雲歴史博物館)

「青」という色、この色に皆さんはどんな印象をお持ちでしょうか?海の色、川の色、空の色として私たちの目に映る身近で親しみを感じる色ではないでしょうか。

「青」は、古くは弥生時代、有力者の好む色でした。弥生の森博物館の西谷3号墓の美しい勾玉をはじめ、当時の多くの装飾品は、「青」でした。

古墳・飛鳥・奈良と、時代は遷り変わっても、有力者は、「青」を好み続けました。

「青」が庶民の色として定着するのはもっと後の時代となります。

室町時代に木綿の生産方法が日本に伝えられ、本格的に栽培されるようになると、染色材料としての「藍」の生産も盛んになりました。

木綿は、江戸時代に全国的に普及していき、農閑期に木綿を織る農家が飛躍的に増え、その木綿を「藍」で染める「紺屋(こうや)」も各地にできていきます。

当館のある出雲市大津町においても、「紺屋」が江戸中期には創業し、繁盛していました。

今回の展示では、1870年(明治三)～1984年(昭和五九)まで、約110年間に渡って操業を続けた旧井筒屋染工場から寄贈を受けた貴重な型紙・下絵・見本帳や道具類を中心に展示を行います。

また、大津町で染められた美しい藍染作品の数々も展示します。

この機会に青という色について考えてみませんか。

(原田 和紀)



旧井筒屋で使用された型紙

★シンポジウム

『古代山陰道』を考える

―杉沢遺跡道路遺構発見の意義―

一昨年、出雲市斐川町の杉沢遺跡で、『出雲国風土記』記載の「正西道(まにしのみち)」「古代山陰道」と推定される道路遺構が見つかりました。市文化財課では、現在、周辺の地形測量など関連調査を進めています。

本シンポジウムでは、最新の調査成果の報告を行い、考古学や古代史、歴史地理学の研究者とともに発見の意義と今後の保存活用を考えます。

詳細は、当館へお問い合わせください。

■日時 2月15日(日)

13時～16時30分

■場所 アクテイーひかわ

■入場料 無料

■申込み 不要



杉沢遺跡の道路遺構

## ★ギャラリー展 しかくろやま

大社の学校の地下に眠る遺跡  
2月4日(水)～6月1日(月)

多くの観光客で賑わう出雲大社の門前町、神門通りの西側に大社小学校や大社中学校があります。学校の周辺は鹿蔵山・鹿倉山(しかくろやま)、鹿黒山(しかくろやま)あるいは鹿城山(かしろやま)などと呼ばれ、その地下には貴重な遺跡が今も眠っています。

遺跡の発見は古く、1902年(明治三五)に現在の大社中学校の場所に建てられた旧制第三中学校建設工事の際に須恵器の破片が拾われています。その後、大社考古学会によって調査が進められ、1968年(昭和四三)には、鹿蔵山遺跡で見つかった土器が指定文化財とされました。本格的な発掘調査は、1983年(昭和五八)と2003年(平成一五)に行われ、弥生時代から奈良時代の多様な遺物が見つかりました。

今回の展示では、今までに見つかった鹿蔵山遺跡の遺物を時代ごとにまとめ、当時の周辺の様子を考えます。中でも注目されるの

は、奈良時代の遺物です。

1983年の大社中学校敷地内の調査では、奈良時代の貝塚が見つかりました。その貝の大半は淡水産のヤマトシジミで、遺跡の南方に広がっていた神門水海の産物が当時の大社の人びとの食生活を支えたことを示しています。また、クロアワビやサザエ、イワガキなど、日本海に面した岩礁の浅瀬に生息する貝も見つかっています。稲佐の浜の北から日御碕へ続く岩場も人々の漁場になったのでしよう。一方、鹿の骨も大量に見つかっています。鎌倉時代の出雲大社周辺の絵図には鹿蔵山に鹿が描かれ、奈良時代にも鹿は身近な食料であったと考えられます。

このように、貝塚の調査を通して、奈良時代の大社の人びとの食生活が垣間見えるのです。

(高橋 周)



発掘調査のようす(2003年)

## ★発掘調査速報展

### 「平成26年度杉沢遺跡 発掘調査速報展」

開催中～3月2日(月)

市文化財課では、(仮称)出雲斐川中央工業団地の開発にともない、2012年(平成二四)から杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群(斐川町直江)の発掘調査を実施しました。調査は今年8月に終了し、弥生時代の集落跡、古墳時代の横穴墓群、奈良時代の「古代山陰道」等、多くの成果がありました。

今回の速報展では、2013年(平成二五)後半から今年度にかけて実施した杉沢遺跡の二丘陵の調査成果をもとに、「弥生集落と昭和の戦争遺構」と題して展示をおこないます。

「弥生集落」では、丘陵に営まれた弥生時代の集落跡を紹介し、丘陵斜面と尾根の一部では、堅穴(たてあな)建物跡や掘立柱(ほったてばしら)建物跡、加工段(かこうだん)(斜面を削って作った、建物を建てるための平坦面)が見つかりました。そのすべてが日当たりのよい斜面に位置し、弥生人の土地利用の工夫がうかがえ

ます。建物跡の内外からは弥生土器、石器が出土し、その特徴を見ると弥生時代中期の終わり頃(約2000年前)のものに限られます。そこから、杉沢の弥生集落は短期間に営まれた集落であることが分かりました。

また、「昭和の戦争遺構」では、発掘調査で見つかったタコ壺(個人用の塹壕(ざんこう))を中心に、調査地周辺の戦争遺構を紹介し、太平洋戦争中、調査地近くには「旧海軍大社基地」が設けられていました。飛行場や物資保管壕などの基地関連施設のほか、防空壕なども多数造られ、一部は今も当時の姿を残しています。その全容はいまだ明らかになっていないため、分布調査や聞き取り調査を進めています。

(奥原このみ)



弥生時代の堅穴建物跡(東から)

★研究ノート⑭  
田儀櫻井家の蔵書

江戸時代は、書物(写本・版本)が広く一般に普及した時代で、多くの蔵書を持つ家も珍しくありませんでした。

現在の出雲市多伎町奥田儀宮本を本拠として、たたら製鉄で繁栄した田儀櫻井家にも、多くの蔵書がありました。これに分かるのが、同家に残された古文書のひとつ、「書物帳(しよもつちよう)」という幕末の史料です。

「書物帳」には、安政三年(1856)頃に同家が所蔵していた書物が列挙されており、その数はおおよそ240点、冊数は1900冊ほどになります。

書物の種類は、『平家物語』『伊勢物語』など今もおなじみの古典や『出雲国風土記』などの地誌、四書五経、俳諧書など広い分野にわたります。これらの多くは現存しませんが、「宮本屋」(田儀櫻井家の屋号)の印があるかつての田儀櫻井家所蔵書物が、今も僅かながら関係者のお宅に残っています。

田儀櫻井家の蔵書は貸出しもされてきたようで、「書物帳」の後半

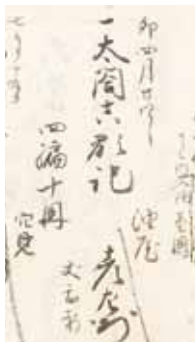


「宮本屋」の印がある本

は、明治初年までの貸出記録になっています。

貸出先で目立つのは、手代をとめた井原屋や、鉄を全国に販売した廻船業者油屋など、たたら製鉄と鉄の流通に関わった人々です。菩提寺である智光院もよく書物を借りていたようです。借手にはその他に、松江藩士や須佐神社、塩冶学校などもあります。田儀櫻井家は、関係者の図書館としての役割も果たしていたといえるでしょう。

「書物帳」からは、田儀櫻井家の文化的交流の一端がうかがえます。(八幡 一寛)



油屋への貸出記録

★発掘調査の現場から⑪  
「越堂たたら跡発掘調査の現地説明会を開催しました!」

出雲市多伎町口田儀の越堂たたら跡では、2013年度(平成二五)から発掘調査を実施していますが、10月4日に現地での説明会を開催しました。当日は好天に恵まれ、多くの方々に参加していただきました。中には県外からの参加者もおられ、越堂たたら跡の注目度の高さがうかがえます。

今後も調査を進め、その成果について改めて紹介する予定ですのでご期待ください。(幡中 光輔)



現地説明会のようす

★講座のご案内

▼出雲市文化財  
保護審議会委員講座

文化財のプロである出雲市文化財保護審議会委員が、その専門分野から出雲の歴史を語ります。

2月7日(土)

「歴史的建造物の魅力とその見方」  
〜出雲のすまいる〜

【講師】和田 嘉宥氏

(米子工業高等専門学校名誉教授)

2月28日(土)

「杵築御埼(きづきのみさき)考」  
〜北山の神秘性〜

【講師】藤岡 大拙氏

(荒神谷博物館館長)

3月14日(土)

「出雲の不昧公(ふまいこう)の茶道」  
【講師】藤間 亨氏

(出雲文化伝承館名誉館長)

右の講座はいずれも

●時 間 14時〜16時

●受講料 各300円

●定 員 80名

●お申込みは、当館まで。

## ★出雲市指定文化財紹介⑫ 平田一式飾り



平田一式飾り『勸進帳』平田支所前

平田一式飾は、寛政五年(1793)に桔梗屋十兵衛(ききょうやじゅうべえ)が、悪病から町民を守るために茶器一式で大黒天像(だいこくてんぞう)を作り、平田天満宮に奉納したのが始まりとされます。

毎年、7月20日から3日間、天満宮の夏祭に町内が競って一式飾を奉納しており、夏の平田を彩る風物として今日まで継承されています。1989年(平成元)には市の文化財指定を受けました。

平田一式飾は、仏具、陶器、茶

器、文房具など身近な生活用具を利用して、神話やおとぎ話の一場面を題材に作品とします。明治期には茶器や仏具が使用されることが多かったようですが、近年は電気器具、自転車部品などユニークな材料も使われるようになりました。時代と共に作品が変化・発達しており、その変化も一式飾を見る面白さの一つです。

一式飾は、平田町にある一式飾常設館や平田一式飾ほんまち展示館、本町商店街などでいつでも見ることが出来ます。保存会では、1994年(平成六)から平田高校生徒に、2008年(平成二〇)からは平田小4年生に製作指導を行い、後継者育成にも取り組んでいます。

現在、平田支所玄関前に展示されているのが「勸進帳(かんじんちょう)」です。有名な歌舞伎十八番(かぶきじゅうはちばん)の一つで、安宅関(あたかのせき)(石川県)が舞台です。源義経(みなもと)のよしつね)を逃がすため武蔵坊弁慶(むさしぼうべんけい)が奮闘する場面をいきいきと表現しています。この機会にぜひ平田一式飾の素晴らしい展示をご鑑賞ください。

(伊藤 靖浩)

## ★館長コラム⑫



百年以上前の明治44年、出雲市万田町の岬(みね)神社で境内を拡げる工事をしていたところ、5月に石棺が、8月には和鏡などが掘り出され、大騒ぎになりました。古墳時代と中世の遺跡が、たまたま近くにあったのです。

この発見についてはよく分からないことが多く、出土品は国に寄贈されたのですが、今は所在不明のようです。

岬神社を訪ねてみると、古墳のあった場所に祠(ほこら)と石碑があつて、関係者がきちんと事後処理をされたことがうかがえます。感心しながら周囲を一巡していると、境内の隅に「憲法発布記念」と刻んだ石碑があるのを見つけました。

碑は少し傷んでいましたが、側面に「昭和二十一年十一月三日 西谷青年団」と刻まれています。それは日本国憲法の公布を記念して建てられた石碑でした。

博物館の職員に調べていただくと、戦争が終わって平和憲法ができたことを喜んだ地元の青年団

が、石材の調達、運搬から刻字まで、すべて自力で建てたものであることが分かりました。



終戦と新憲法が当時の若者に与えたインパクトの大きさを知って、私は胸が熱くなりました。こうした石碑も、地域史の貴重な証言者として顕彰し、大切に保存したいものです。(渡邊 貞幸)

### (発行)出雲弥生の森博物館 2015年1月

〒693-0011 島根県出雲市大津町 2760

(TEL) 0853-25-1841 (FAX) 0853-21-6617

(e-mail) yayoi@city.izumo.shimane.jp

http://www.city.izumo.shimane.jp/yayoinomori

●入館料 / 無料

●開館時間 / 9:00 ~ 17:00 (入館 16:30 まで)

●休館日 / 火曜日(祝日の場合は翌日)・年末年始